

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：34306

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12204

研究課題名（和文）空海の遺志に立ち返る碩学たち：近世後期の「根本説一切有部律」研究

研究課題名（英文）The Mulasarvastivada-vinaya studies in Edo-period Japan

研究代表者

岸野 亮示（Kishino, Ryoji）

京都薬科大学・薬学部・講師

研究者番号：40760137

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、(1)「根本説一切有部律」という戒律テキストの研究・宣揚に取り組んだ近世後期の学僧たちが撰述した同律に関わる研究書の実見調査を国内の寺院（2箇所）と図書館（8箇所）において行い、その現存状況を明らかにした。(2)なかでも學如（1716-73）が校訂・出版した『根本薩婆多部律撰』というテキストに同時代の学僧たちによる詳細な書き込みが加えられていること、そのテキストに寄せられた密門（1719-88）の序文に「根本説一切有部律」の伝承に関する珍しい記述が含まれていることに注目し、その序文と書き込みの訳注を、アクセス可能な八つの版本を参照して提示することで、その全貌を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、近代仏教学が導入される以前の日本において「根本説一切有部律」という戒律テキスト、およびその綱要書である『根本薩婆多部律撰』というテキストがどのように解説・理解され、伝承されていたのか、その一端が明らかになった。その意義としては、これまで等閑に付されてきた日本の近世における「根本説一切有部律」研究の再評価を促すことができたことと、これまでほとんど手付かずであった『根本薩婆多部律撰』研究の足がかりを構築することができたことが挙げられる。

研究成果の概要（英文）：(1) I examined two temples and eight libraries in Japan for Edo period Buddhist texts related to the Mulasarvastivada-vinaya attributed to those monks who highly valued that vinaya in Edo period Japan, such as Gakunyo (1716-73) and Mitsumon (1719-88). (2) I focused my academic attention especially on one of those texts, Gakunyo's edition of the Vinaya-samgraha, since it contains the foreword written by Mitsumon that explains how the Mulasarvastivada-vinaya had come to Japan from India through China. Moreover, many of the copies of Gakunyo's edition of the Vinaya-samgraha preserve a large number of handwriting annotations that undoubtedly belong to the hands of several Edo period monks. Referring to the eight copies of Gakunyo's editions of the Vinaya-samgraha, I translated and glossed the whole texts of Mitsumon's foreword and the handwriting annotations to it, so that I shed light on several aspects of Edo period monks' understanding of the Mulasarvastivada-vinaya.

研究分野：仏教学

キーワード：學如 根本説一切有部律 有部律 根本薩婆多部律撰 律撰 真言宗 密門

1. 研究開始当初の背景

本研究の基礎資料である「根本説一切有部律（こんぼんせついつさいぶりつ）」という仏教正典は、インドからチベット語文化圏と漢字文化圏の双方に伝わった唯一の戒律テキストとして学術的な重要性が高く、また日本においては、自分たちの高祖である空海（774-835）が、ひそかに重視したことを知った江戸時代の真言僧たちが重点的に研究して宣揚することにより、その後の日本の仏教界全般に少なからず影響を与えている。

ところが、従来の仏教学界においては、スリランカや東南アジアの仏教諸国において伝統的に準拠されているパーリ語で現存する戒律（一般に「パーリ律」と呼ばれる）と、漢字文化圏の仏教諸国において最も一般的な『四分律（しぶんりつ）』という戒律が戒律研究の中心であり、「根本説一切有部律」は、漢訳・チベット語訳ともに翻訳年代が比較的新しいことから研究は手薄であった。そのため、「根本説一切有部律」が、極東の日本において、江戸時代の真言僧たちにより重視されたこと自体、学界においてはあまり知られておらず、彼らが「根本説一切有部律」をどのように読み、理解し、その正統性をどのように見出していたかという点に至っては全くと言っていいほど究明されていない。その要因としては、先に述べた通り「根本説一切有部律」に関する専門的知識を十分に備えた研究者が未だ少ないことに加えて、江戸時代の学僧たちが著した一次資料へのアクセスが困難であることも挙げられる。その多くは行方が不明であり、現存が確認されるものでも、日本国内の図書館に貴重書として所蔵されているか寺院に安置されているため、閲覧が容易ではないのである。

2. 研究の目的

以上のような背景のもと、本研究は、「根本説一切有部律」の専門家である筆者が、(1) 近代以前の日本における「根本説一切有部律」に関する文献はいかほど現存しているのか、(2) 近代仏教学が導入される以前の日本における同律に関する理解や伝承はどのようなものであったのかという二つの学術的な問いに答えることを大きな目的としている。より具体的に言えば、①日本国内の図書館（8館）・寺院（2箇所）において、江戸時代の「根本説一切有部律」宣揚運動に関わった学僧たちの著作・編纂物の実見調査を行い、その書誌情報と概要を明らかにすること、更には、②その一つである學如（1716-73）が校訂・出版した『根本薩婆多部律攝（こんぼんさつぱたぶりつしょう）』の版本に特に焦点をあて、各地に現存するその版本の多くに同時代の学僧たちの手による、ほぼ同一の詳細な注釈が書込まれている点、また、その學如版に寄せられた密門（1707-88）の序文に、「根本説一切有部律」のインド・中国・日本における伝承史に関する興味深い記述が見られる点に注目し、書込みを含めた全文を解説・分析することで、彼ら江戸期の学僧たちの「根本説一切有部律」理解を検証することを目的としている。

3. 研究の方法

具体的な研究方法は以下の通りである：

(1) 閲覧・調査の承諾を得ている計 10 箇所の図書館・寺院において資料を実見し、資料を撮影の委託ないしは自らの撮影により電子データ化し、その書誌情報と概要を明らかにすることで、近世後期の「根本説一切有部律」に関連する文献の存在をさらに世に知らしめる。

(2) その中でも學如の編集・出版した『根本薩婆多部律攝』に関しては、各地の版本を参照し、そこに書き込まれた注釈を参照しながら解説を進め、結果、現存が確認されている版本を網羅的に参照した、精度の高い義浄訳『根本薩婆多部律攝』の解説を実現する。そして特に、密門の寄せた序文に関しては、同律の伝承史に関する珍しい記述が含まれているため、その全貌を詳細な訳注と影印を通じて提示する。

(3) 『根本薩婆多部律攝』に書き込まれた注釈の内容を近代以降の「根本説一切有部律」研究の成果に基づいて分析することで、江戸時代の学僧たちの同律に対する理解の特徴（とくに彼らが「根本説一切有部律」の重要性と正統性をどこに見出していたかという点）とその精度を明らかにする。

4. 研究成果

詳細は次項に譲るが、本研究の成果としては、著書 1 冊、雑誌論文 6 本を公刊し、学術大会における発表を 5 度おこなった。なかでも密門の序文に焦点をあてた論考（2022）は、132 頁にもおよぶ大部のものとして、その全貌提示が実現した。これらの成果を通じて、近世後期の学僧たちの律理解の特徴や、彼らが「根本説一切有部律」の正統性をどのように見出していたのかという論点の一端が明らかになるとともに、彼らの学識が 20 世紀以降の近代仏教学の成果によるそれと比べても決して遜色がなく、時にそれを凌駕するほどの精度の高いものであることが明らかになった。このことから、今後は、近代仏教学が見落としがちな近代以前の日本人学匠の優れ

た研究成果に対する再評価が促され、また、日本における「根本説一切有部律」の伝承という未だ研究が手薄な課題に学術的な注目が集まることが予想される。さらには、特に學如版の『根本薩婆多部律攝』を用いた同テキストのチベット語訳と漢訳テキストの対照研究により、同テキストについての総合的な研究の足がかりを構築することができたと言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Kishino Ryoji	4. 巻 77
2. 論文標題 The Implications of Bu ston 's (1290-1364) Doubts about the Authenticity of the Vinaya-samgraha.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko	6. 最初と最後の頁 107-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Kishino Ryoji	4. 巻 印刷中
2. 論文標題 A Preliminary Report on the Vinaya-samgraha: *Visesamitra 's Comments on the 72nd Payantika	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Dr. Schopen's Festschrift	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 岸野亮示	4. 巻 109
2. 論文標題 律尊者西本龍山：大谷大学と「根本説一切有部律」研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 佛教學セミナー	6. 最初と最後の頁 27-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Kishino Ryohji	4. 巻 113
2. 論文標題 A Translation of the Story of an Angry Monk Who Became a Poisonous Snake in the Muktaka of the Mulasarvastivada-vinaya: Part One, Two Cliches	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佛教學セミナー	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岸野良治	4. 巻 3
2. 論文標題 金龜山福王寺が所蔵する『小部類集』に含まれている「律蔵目録」について：近世後期の律理解	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都薬科大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岸野良治 (亮示)	4. 巻 33
2. 論文標題 學如 (1716-73) の 編纂した義浄訳『根本薩婆多部律攝』に付せられた密門 (1719-88) の序文と、そこに 加えられた書き込みについて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西山禅林学報	6. 最初と最後の頁 1-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 岸野良治
2. 発表標題 學如 (1716-73) 撰『根本薩婆多部律攝』に寄せられた密門 (1707-88) の序文について：近世後期の「根本説一切有部律」理解
3. 学会等名 日本印度学佛教学会第72回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岸野亮示
2. 発表標題 インドにおける「行像」の由縁は何か？
3. 学会等名 日本印度学佛教学会 第71回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岸野亮示
2. 発表標題 律に説かれる「行像」：「根本説一切有部律」を中心に
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第70回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岸野亮示
2. 発表標題 Vinaya-samgraha 研究序説
3. 学会等名 日本印度学佛教学会 第69回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岸野亮示
2. 発表標題 『Vinaya-samgraha』研究序説
3. 学会等名 大谷大学仏教学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岸野亮示	4. 発行年 2020年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 116
3. 書名 シリーズ実践仏教2：現世の活動と来世の往生	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------